

▶▶▶加藤 裕治

## 木下恵介のシンポジウムから

先月の本コラムでも紹介した生誕百周年記念シンポジウム「木下恵介のまなざしを探る」が、予定通り十月八日、浜松の木下恵介記念館で開催された。

一人目の登壇者である原田忍さんは、木下監督の五歳上の兄のお子さんと、監督の養子にもなった。報告では、木下監督の手紙をご紹介いただいた。一九五一年のパリ旅行の際は、現地でテレビを視聴したという。日本でのテレビ放送は五三年開始なので、それよりも二年前にテレビ放送を見たことになる。私の専門からも、興味深い内容の手紙だった。

二人目の登壇者は東京大学のマチュー・カペル先生。戦後の日本映画がご専門。シヤープな切れ味で、木下映画を分析するご報告だった。中でも私の印象に残ったのは、風景と家屋の対比について。木下映画では大空を背景とした美しい風景が出てくるが、その対極にあるのが大豪邸だという。それは家父長制の比喩であり、閉塞の象徴なのだ。一方、風景はそこから解放を示す。改めて映画を見直したくなる、素晴らしい指摘であった。

さて私は、これまでほとんど語られていなかった「木下恵介とテレビドラマ」を報告した。調査から分かったのは、木下監督のテレビ進出は六四年と言われてきたが、それ以前からラジオやテレビにドラマ脚本を提供していたことだ。

映画からテレビへとメディアの中心が変化する中で、どう新しいメディアと付き合っていたのか。メディア変容が激しい現代にも通ずるテーマを、今後も調べていきたい。

今回の報告準備のために木下監督の作品を見返し、シンポジウムで登壇者の報告を聞き、改めて木下作品の多様性に触れた。例えば「大曾根家の朝」（四六年）では、戦争の際、軍や為政者の側が、いかに人々をおおりに戦争に駆り立てるのか。そしていかに責任を取らないのかが描かれている。このメッセージはまさに現在のためにあるよっだ。木下作品の魅力は尽きない。

（静岡文化芸術大教授）